

第5章 アンコールの笑顔 ～カンボジア ベトナム～

この旅行の後、私はアンコールの素晴らしさを人に語る。

5.1 カンボジア

5.1.1 カンボジアは遠いか 1998年4月24日(金)

朝6時に寮を出た。昨日は寝たのが2時頃だったので非常に眠い。眠りながら歩いていて、地に足がついていない感じだ。福岡空港までの道のりと空港内は前に一度来ているので見慣れたものだ。それでも空港に来ると何だかわくわくして、腹の底から喜びが湧き上がってくる感じだ。自然に顔がニコニコしてしまう。空港で買った貴重品入れは失敗だった。T/Cがぎりぎり入らない大きさなのだ。あと5mm長さがあればいいのに。もう無駄なものを買ってしまった。

出国手続きで初めて手荷物検査に引っかかった。ハサミは以前にも持って行ったことがあるが、引っかかったことはないぞ。また、キンチョールのスプレーもいけなかったらしい。機械が反応したのはそっちか。その二つは預けることになった。キンチョールの缶とハサミ…二つ並べて置かれると、なんか怪しく見えるな。俺が何か企んでるみたいだ。今回の旅行中、全ての空港で引っかかるのだろうか。面倒なもん持ってきちまったな。

9:35に福岡を飛び立ち、現在10:35。10時ごろから鹿児島空港上空にいる。天候が悪くて着陸できないそうだ。なんで鹿児島経由なんだ？知らなかったぞ。鹿児島なんか寄らずに直に香港行けよ！国内でつまづいてるなんて腹が立つ。乗り継ぎできなかつたらどうなるんだ。機内放送では、最悪の場合福岡に戻ってから香港に行くとか言ってるぞ。おいおいおい！香港行け！戻んな！俺は今日カンボジアまで行くんだ。ロイヤルエアーカンボージュ(VJ)に乗れなかつたら行けないじゃないか！

11:05 着陸した。約1時間鹿児島上空にいた訳だ。ごくろうさま。でもこの先も安心できんな。何かこの旅の先行きを暗示しているような…。

14:45 香港着。現地時刻は13:45。間に合うのか？と思ったけど、そうか、時差があったんだ。時計を1時間前に戻した。噂に聞いていたとおり、香港の空港は都会のど真ん中にある。高層住宅が立ち並ぶすぐ上を飛行機が飛ぶのだ。以前中央林間に住んでいた時、厚木飛行場の飛行機がうるさかったけど、ここは想像を超えるうるささに違いない。こんなところ住みたくないな。

15:45(香港時)ごろ離陸。今度はJAA(Japan Asia Airways)だ。窓のない席になってしまった。途中、ベトナムのダナン上空を通るそうだ。ダナンには行かないけど、何か見えるのかな。でもどっちにしろ窓がないから見えない。機内ではまた朝7:00のNHKニュースが流されている。もうさっきの飛行機で見たって。

今回はスチュワーデスがとてもきれいだ。日本人かと思ったけど、しゃべっているのを聞いたら日本人じゃない。中国語かな。周りの客と同じ言語らしい。私もその中華系の客の1人だと思われたのか、同じ言葉で聞かれる。その後英語だ。しかし綺麗だなあ本当に。

17:15(現地時)バンコクに到着。時計を更に1時間前に戻す。キンチョールのおかげで乗り継ぎに時間がかかる。キンチョールとハサミを受け取った時、出発まで1時間を切っていた。入国した意味が全然ないぞ。VJのチェックインカウンタを探して走り(途中であのスチュワーデスさんを一目見られた!)、見付けるとそこは人けがなかった。ヤバイのでは?心配になる。次は出国審査の場所がどこかわからず走った。なんのことはない、チェックインカウンタの柵を出た真正面だった。しかし!500バーツの空港税が必要だとそこで知る。おいサンボード(今回航空券を買った大阪の旅行会社)、前もって教えとけよ。飛行機に乗り込むと私のボーディングパスにある座席番号の席が埋まってる。なんで?空いてる席に座らされた。しかしめっちゃくちゃ暑い!小さい飛行機だな。

20時ちょい過ぎ。ようやく到着しました、プノンペン。外は真っ暗。着いてすぐVISAの申請用紙に記入していると、

「一人か?ホテルはどこだ?連れてってやるぞ。5ドルで。」

と話しかけて来る30才前後の兄ちゃんがいた。VJの職員だ。まだ入国審査もしていないところでだ。信用して良いものかどうか、初めは適当に聞いていた。もう一人別の兄ちゃんはアプリケーションフォームを記入してくれて、手続き中ずっと付きまどってきた。

外へ出るとタクシーやらバイクの兄ちゃんがたくさん寄って来た。どんどん値段は下がったがバイクは怖いのでやめておいた。そしたらバイクの連中は最後に、

「フリー!」

ときたもんだ。なんなんだ、とても疑わしい。結局最初に声を掛けてきたVJの兄ちゃんに付いて行き、彼の車に乗った。

私は後部座席に座り、助手席には彼の奥さんと子供が乗った。ちょうど帰るところだったのか、安心させるための作戦かはわからないが、私の警戒心は少し和らいだ。Rex Innに行きたいと最初に言ったのだが、彼のおすすめの宿に連れていかれた。外が暗かったのでいったいどこに連れてこられたのかわからなかった。宿の名前はMORAKAT HOTEL。セントラルマーケットの近らしい。食事するところも近くにたくさんある。

途中車の中で彼と話したが、私が英語を10年間も勉強したと言うととても驚かれた。彼は1年間勉強したそうだ。しかし彼の方が明らかに流暢に英語を話す。いつもながら恥ずかしい。彼は英語のTeacherをやったこともあるそうだ。町の英語塾が何かだろう。彼は来月からO±cerになるそうだ。空港からO±ce勤務に移り、給料もアップする。会社にO±cerは何人もいない、ととても嬉しそうに話してくれた。途中大学があり、彼はそこを出たと言っていた。VJって国営だからな。やっぱりスタッフは国の中でも優秀な人たちが集まってるんだろう。

シエムリアップに行くチケットを取りたいといったら、明日朝 8:00 に迎えに来て、トラブルエージェンシーに連れて行くことを約束してくれた。航空会社の人だからその辺は詳しいだろう。明日は土曜日だし、とても助かった。

自分の中でのこの、人を半分信じて半分疑ってる感じ。これまでの旅行で身につけたものだと思う。いいのか悪いのか。でもこの部屋、ちょっと良すぎる。テレビと冷蔵庫はなくてもいいぞ。鏡台も。快適すぎる…。まあ初日だから安心できていいか。

いやー今日は本当に強行軍だった。特にバンコクではあわただしかった。なんとかここまでたどり着けて良かった良かった。さて、今後はシエムリアップへのチケット次第。それによって予定が変わる。決まっているのは 29 日にはカンボジアを出国するということだけだ。トラブルが起これないことを願う。

現在 23:08。おやすみ。キンチョールは VJ で没収された。

5.1.2 タイ + インド = プノンペン？ 1998 年 4 月 25 日 (土)

カンボジアでの初飯。朝 7 時に外へ出て、セントラルマーケットあたりをうろついてみた。町は活気にあふれていて、ようやく外国へ来たという感じがした。アジアだ。町の様子はタイとインドが混ざった感じ。歩きまわっている途中でうまそうな飯を見かけたので食べてみることにした。鶏肉のせご飯。うまい。テーブルにあったトゥクトレイ(魚醤)もかけてみたが、なかなかいける。US\$1 払ったら 500 リエルのつりが来た。いくらだったのかはわからない。

8 時の約束だったので宿へ戻り、カウンタの前の椅子で待った。8 時ちょっと前に彼が現れ、チケットを取るべく旅行会社へ向かった。そこは中華系の店で、3 人しか人がいない。応対してくれたのは 17 か 18 才ぐらいの女の子だった。それから、その子と同じぐらいの歳の男の子もいた。《店番かな?》とも思ったが、やけに慣れていてどうやら本職らしい。それとも見た目より歳とってんのかな。チケットはあっさり取れた。まずはひと安心だ。明日はシエムリアップへ行ける。

その後は再び VJ の彼の車に乗り、市内観光へ行くことにした。まずは王宮。ここはタイのワットプラケオにそっくりな雰囲気のところだ。しかしちょっとヒンドゥーが入っている。人はほとんどいなくて、庭はとても手入れが行き届いていてきれいだった。その後の国立博物館でもブッダだけでなくヴィシュヌの像が沢山あった。インドに行ってからラーマヤナとかマハーバーラタについての知識を深めていたので面白かった。知ってるキャラクターがいっぱいいるのだ。だが博物館の中で最も気をひかれたのは、目を閉じて座っているジャヤヴァルマン七世の像である。その像はまるで生きているようであり、顔を真っ直ぐ見つめるのにどきどきした。今にも目を開けてこっちを見られそうな雰囲気があった。

王宮を見た後 VJ の彼が、O_{±ce} に呼ばれたから行かなければならないと言ってきた。その変わり俺の弟が後を引き継ぐと紹介された。彼は車のキーを弟に渡し、弟が乗ってきたバイクで去った。

それからトゥールスレン博物館へ行った。ここはかつて刑務所だったところである。血の跡がついたベッドのある部屋。そして壁にはそのベッドに人が縛り付けられている写真。

床に拘束具。まるで今さっきまでそこに人が居て苦しんでいたような生々しさ…。殺された人の写真が壁にずらーっと貼ってある部屋は、入った瞬間、思わず

「うっ。」

と言って後ずさりしてしまった。空気が違う。壁の全ての人の目がこちらを見ている。拷問器具や、本物の頭蓋骨で作ったカンボジアの地図などもあって、とても沈鬱な気分させられた。

《恐ろしい。》

いろんな恐ろしさがそこにはあった。これはポル・ポトがやったことを知る場所だ。カンボジアの人たちは我々外国人旅行者にこれを見せ、語り、何ごとかを訴えたいのだろう。その後キリングフィールドにも行ったが、実体験に基づく話はすごかった。残酷な話が次から次へと語られた。キリングフィールドにいたあのガイド、最後に金をねだらなければいい奴だったのに、^{ほていとやす}布袋寅泰に似ていた。

何だかとても疲れた。宿のチェックアウトタイムを過ぎていたこともあったが、もう宿に戻って休みたかった。暑さと体力の消耗と、さらに沈鬱な気分とでまいりそうだった。宿に着き、ドライバー（弟）に20ドル払い、明日の朝空港まで送ってもらうことを約束して別れた。早朝のフライトなので、5:30には宿を出なければならない。

フロントでキーを受け取り、もう一晩同じ部屋に泊まることにすると、明日は日本に帰るのかと聞かれた。シェムリアップに行くことを話すとホテルを紹介してくれて、もしそこに泊まるなら連絡するよと言ってくれた。シェムリアップの空港に迎えにも来てくれるというので頼んだ。このフロントの兄ちゃんはとてもいい人だ。人の良さが顔ににじみ出ている。

部屋に戻ってから1時間ばかり眠って、今日の午後の予定を考えた。まず、金が足りない。『地球の歩き方』を見るとカナディアンバンクが土曜日でも15:30まで開いているということなので、そこへ行ってUS\$のCASHを得ることにしようと思った。それから、ベトナム航空（VN）のリコンファームをしなければならない。プノンペンにいううちにしておいた方が良さそう。14時ごろ再び出かけた。しかし、カナディアンバンクは閉まっていた。土曜日は11:30までと書いてあった。くそー。町の両替屋で¥から\$に替えられるところがあると聞いていたので、歩いて目に入ったところで1万円を\$71に替えた。

それから歩いてVNのオフィスへ行ってみたが、そこも閉まっていた。まただ。『地球の歩き方』の情報は古いのかな。帰る途中、電話があったのでかけてみたが、FAX音みたいなのがピーガーと鳴っていた。もう一つの電話番号では呼び出し音は鳴ったが誰も出なかった。宿に戻ってからフロントの電話でも掛けてみてもらったがダメだった。リコンファームできん。どうなるんだ？月曜日までできないとすると、72時間切っちゃうんだけど。

フロントの兄ちゃんはシェムリアップの宿に明日の予約をしておいてくれた。ここから空港までのタクシーもただで手配してくれると言ってくれたのだが、もうすでに約束があるので断った。あーもったいない。

17:00ごろに夕飯のためにまた出かけた。うろろろしているとある店先で誘われたので、その店に入った。カンボジアンヌードルスープはやはり独特の味だ。麺は平たい。牛肉と

ミンチボールと葉っぱが入っている。うまかった。テーブルにはお茶(烏龍茶系のもの)が置いてあり、ただで飲み放題だった。この店にはフランスパンのサンドイッチもある。麺は2,000リエルだったが高いのか安いのか全然わからん。店を出て、水を買って宿へ戻った。

カンボジアはタイとインドが混じった国。タイとインドへ行った人に、プノンペンはこちらのもの足りないと思う。特にインドに行ってしまうと、その後に旅行するどの国ももの足りない感じがしてしまうのではないだろうか。アンコールに期待。

今日はとても疲れた。明日は5:30出発だ。おやすみ。

5.1.3 シェムリアップへ行け 1998年4月26日(日)

昨日の兄ちゃんは来なかった。寝坊したのか忘れたのか、初めっからすっぽかす気だったのかはわからないが、5:30を過ぎたのでバイクタクシーを使うことにした。空港まで2ドル。バイクの後ろに乗って朝の町を通り抜けるのはとても爽快だ。空港へ着いたのは5:45ごろだった。チェックインカウンタには6:10 closedの表示がある。早く出て正解だった。空港税US\$10を払うカウンタの人はナインティナインの岡村隆史にそっくりだった。顔だけでなく、背格好や仕草まで。早朝の便だからかもしれないが、飛行機の座席は結構空いている。

シェムリアップに着いて空港を出ると、私の名前を書いた紙を持っている人が立っていた。男3人。車に乗って宿(BOREY ANGKOR VILLA)へと向かった。とても陽気で楽しい奴らだ。宿では最初、えらく綺麗な部屋に通された。いかにも高そうだ。いくらかと聞くと\$20だと言う。プノンペンで\$20の部屋に泊まっていたからだろう。でももうすこし安い部屋がないかと聞くと\$15のがあると言うのでそっちにしてもらった。でも部屋を整えるからちょっと待ってくれという。どうやらこの\$20の部屋は私のために準備してくれていたらしい。ごめんね。

9:00からアンコール遺跡観光に行くことにした。バイクタクシーの彼の名はSavey。遺跡までの道のりもまた楽しい。いい景色だ。

| | | | | | | | | | | | | | | {

今、アンコールワット第3回廊の一角に座っている。さっきまで日本語を話す子供ガイドが付いていたが、今は一人。ガイド料\$5は高いぞ。ここはとても静かだ。観光客はほとんどいない。なぜだろう。思っていたよりも人がいなくて、孤独に浸れてとてもいい。階段が「うそでしょー」と思わず叫んでしまうぐらいきついので疲れるが、全然かまわない。のんびり観てまわれれば良い。第一回廊の壁にはラーマーヤナなどのレリーフが続いている。また、十字回廊には昔々にやってきた日本人、森本右近太夫の墨で書いた落書(?)が残っていたりして面白い。でも「1997」とか自分の名前を彫ったバカものもある。ヒンドゥーの寺院だが、現在は仏陀も奉られている。ところどころに僧侶が座り込んでいたりもして、土地の人々は日常的に自由に入出入りしているようである。尼僧に何やら背中をポンポン叩きながらお祈りをしてもらったりもした。入口から寺院を遠くに見るのも、寺院

内から周りを見るのもとても素晴らしい景色。ここは私の大好きな遺跡のひとつとなった。絶対に来て損はしない。ただし、体力のあるうちに来るべきところだ。

そしてバイヨン。アンコール・トムを中心に位置するこの寺院はすごい。アンコール・ワットより感動的な遺跡だ。すごいものを作ったもんだ。これは多くの人に「見に行け！」と言いたい。この素晴らしさは言葉で説明しづらい。私はこのバイヨンが一番好きだ。

アンコール・トムの印象的な南門をくぐると、木に挟まれた長い真っ直ぐな一本道が続いていた。その道の向こうにバイヨンの一部が見える。Saveyのバイクで真っ直ぐな道を走り、近づいて行く。すると…両脇の木々がパツとはれて、開けた視界の左の方に想像よりも高いバイヨンの中心部分がそびえ立っていた。遠くから見えていた部分はバイヨンの中心ではなかったのだ。想像よりも巨大だ。

「うわー。」

バイクに乗ったまま声を上げ、見上げる。無数の四面仏。なんともいえない石の色。ものすごい存在感。バイクを降りて近づくと、崩れ落ちそうになって補強されていたり、進入禁止と書いてある部分があくつかある。歩き、立ち止まり、ぽかーんと口を開けて見上げてしまう。

ここでは4人組の小さな女の子がついてきた。ときどき横や後ろから扇子であおいでくれる。また、こっちを見るとバイヨンの中を案内してくれたり、お祈りしたり、一緒に写真を撮ったり、ポリスを見かけると一緒に逃げたりした(なんでだ?)。それは、とてもとても楽しかった！一応最後にガイド料として\$3渡した。

「もっと！もっと！」

と言われはしたが、別にながめつくしていやな感じはしなかった。それ以上払わなくても笑顔は変わらず、バイクはあっちだよと待っているSaveyを見つけて、手を振って送ってくれた。今までいろんな国で、観光地にいる「勝手にガイド」には腹がたった。だがここシエムリアップでは全然腹がたたない。それどころかとても楽しいのだ。なんていいところだ。素晴らしい遺跡と子供たち。そして遺跡を修復する国際プロジェクトの力を感じる。1日でここが大好きになった。今日は暑さで倒れそうになりながら、アンコール・トムをひととおり見てまわった。

宿に帰ると、ここを取り仕切っている彼女が笑顔で迎えてくれた。荷物は\$15の部屋に移しておいてくれた。このミニホテルは改装&増築中で、これから部屋数が増えるらしい。\$15の部屋も改装したばかりでなかなかきれいだった。増築作業がうるさくてごめんねと言われたが、どうせ昼間は出かけてるから気にならない。\$20の部屋との違いはTVがないのと、風呂がなくてシャワーだけというところぐらいだ。石鹸もタオルもトイレットペーパーもある。冷蔵庫まである。エアコンと扇風機もある。とても快適だ。中庭もあってなかなかセンスがいい。部屋代とバイクタクシー代はいつでも好きな時に払ってくれればいいと言ってくれた。なんて大らかなんだ。そんなに人を信用してもいいの？観光客の中にはタチの悪い奴もいるよ。

5.1.4 遺跡と笑顔に囲まれて 1998年4月27日(月)

たくさんあるアンコール遺跡の観光は体力勝負だ。どの遺跡に行ってもとても疲れる。だがどこも静かでのんびりできていい。観光地としてまだ出来上がっていない感じもとてもいい。

そしてこの宿もとてもいい。女主人(?)をはじめスタッフはみな感じのいい人達ばかりだ。信用できる。安心して過ごせるのだ。こんなに安心できる場所は今まであっただろうか。全てが魅力的だ。

遺跡のあるところを日常的にバイクをとばして走り抜ける。何ともカッコいいじゃないか。それからこの宿の彼女。なんて素敵なんだろう。昨日、夕飯を食いに部屋を出たら、フロントに彼女がいて、男どもがいっぱい集まっていた。彼らはただのスタッフかな。でも彼女は男どもの憧れの的に違いない。若くて明るくて器量よし、という感じ。こういう人を性格美人って言うんだろうな。そして何より安心感を与えてくれる。うーん、好きになりそうだ。ここにまた来たい。

昨日見たバイヨンが一番感動的だったが、今日観た中ではタ・ケウが素晴らしかった。最初見た時にはそこまでの遺跡観光で疲れていたの、あのすさまじい階段に驚ろかされた。《えー? これ登るの?》という感じだった。あまりにもハードだった(へばりついてロッククライミングやってんのかと思った)ので、上で1時間ぐらい休憩した。ここに限らず、アンコールの遺跡の中では安心して眠れる。一人になれるし、程良い日陰もあってとても静かだからだ。場所によっては子供たちがしつこくついてくるところもあるが腹は立たない。

今日バイヨンの前をバイクで通りかかったときには、昨日のあの女の子たちが気付いて手を振ってくれた。例の

「お兄さん！」

を叫びながら。また今日最後に行った東メボンでは、ジュースの入ったクーラーボックスを持って、大声で

「お兄さぁーん！」

と叫びながら全力疾走でやってくる面白いお姉さんがいた。笑った。疲れていたけどとても愉快だった。

5.1.5 Good luck! 1998年4月28日(火)

Saveyに勧められ、今日の午前中はアンコール・トムから北へ40kmほど行ったところにあるバンテアイ・スレイへ行った。この遺跡の彫りは深くて鮮やかだ。石は赤みがかっている。アンコール遺跡群の中で最高の美しさを誇る彫刻だ。舗装されていない道をバイクで行くので、帰ってきたときには全身真っ赤な砂だらけだった。アンコールワット近くでは、弾薬を積んだトラックが西の方へ走って行った。ここに武器は似合わない。午後は町をぶらぶらした。シェムリアップは本当に素晴らしいところだ。

さっき Savey のバイクで空港まで来た。

「もし友達が来るなら言ってくれ、迎えに行くから。」

と言ってくれた。彼は高校を卒業して、大学に行くお金を貯めるためにバイクタクシーをやっているそうだ。カンボジアの大学はプノンペンにある一つだけと言っていた。私を乗せて遺跡めぐりをしているときも、彼はバイクのシートの下に常に英語の本を携えていた。日本語が話せなくてごめんと言われたが、そんな必要は全然ないよ。君の英語は大したもんだ。お互い

「See you again. Good luck!」

と言って握手して別れた。これが一人旅の醍醐味だ。友人になったという確かな手応えがあった。彼はとてもいい奴だ。宿の彼女も。彼女は女主人ではなかった。名刺の Mrs. というのは彼女のボスだそうだ。良かった。(って、何を期待してるんだ俺は。)

17:15 のフライトだが、まだ空港に飛行機は来ていない。小さな空港だから、私の乗るのが来ていないということはこの飛行場に飛行機が1機もないということだ。

ここはいずれ大きくなるだろう。大きなホテルもいくつか建設中だった。今日の午後、川べりのベンチに座っていると日本語を学んでいて私に話しかけてきた男の子がいた。教科書「しんにほんごのきそ」を見せてもらったり、通っているのはプライベートスクールで、授業料は1か月\$10 だと言うのを聞いたりした。がんばっている。底抜けの明るさと素直に人を信用するところ。そして素敵な笑顔。どうか変わらないでほしい。

旅行者なんてみんな勝手なものだ。ちょっとの滞在で好き勝手なことを言う。私もその一人。ここも便利になり、観光地として発展してくると人も変わってくるだろう。よりタイヤインドに近付いて行くに違いない。でもどうか金、金、金という目にだけはならないで欲しい。それは観光地として最悪の完成形なのだ。

この時期にここへ来れて本当に良かった。シェムリアップという素晴らしい土地と素敵なあなたたちのことは一生忘れない。ありがとう。

5.2 ベトナム

5.2.1 新たなる出会い 1998年4月29日(水)

昨日プノンペンではまた MORAKAT HOTEL に泊まった。フロントの兄ちゃんにお礼を言い、シェムリアップは楽しかったと報告した。部屋はまた同じ 208 にしてくれたが、シャワーの温水器が漏電していて感電した。危ない。でもなんか我が家に帰ってきたような安心感があった。TV で NHK を見たのでまるで日本にいるみたいだった。

今日の朝は宿に一番近い店でクイティウを注文した。ベトナムのフォーと同じようなものだ。なかなかうまかった。そして、テーブルの上に置いてある揚げ春巻も1つ食べてみた。これもいける。でも、烏龍茶っぽい熱いお茶が一番おいしかった。私が座ったら新しく持ってきてくれたのだ。カンボジアの食堂では、たいていこのお茶の入ったポットが各テーブルに置いてある。前に違う飯屋へ行った時には氷入りのグラスが出て来て、それにこのお茶をついで飲んだ。でもこれ、熱い方がうまいな。

昼ごろフロントの兄ちゃんに別れを告げて、バイクタクシーで空港へ向かった。今日も

とても暑い。顔や腕は日焼けし、カンボジアにもなじんできた。風がさわやかだ。今日でカンボジアともお別れ。空港へ行く途中には大学がある。Saveyの顔が浮かぶ。彼はいつでもここへ学びに来るのだろう。シエムリアップでの素晴らしい日々が思い出される。戻りたかった。

飛行機はベトナム航空。また小さい。飛行機の中での私のセンチメンタルな気分は、隣りにすわったフランス人のおちゃんがブーっと鼻をかんだり、やたらと落ち着きがなくてごそごそするので笑ってしまい、ふっ飛んでしまった。次はベトナムだ。

| | | | | | | | | | | | | | | {

1時間もかからずに私はホーチミンの空港へと降り立った。入国手続きがこれまた長い。係の作業がのんびりしていて遅いとは聞いていたが、客は30人ぐらいしかいないのにえらく待たされた。本当に遅い。別に急いでないからいいけど。

空港を出てからは空港タクシーに乗った。出入国カードに書く滞在先を適当にNhu Lanと書いたが、別にそこでなくてもいいやと思い、運転手にファンゲラオ周辺の適当なところを紹介してもらうことにした。途中、統一会堂（旧大統領官邸）前を通りかかると、軍服を着た連中がたくさん集まっていた。なんかのセレモニーをやっているみたいだ。運転手に聞くまで気付かなかったのだが、明日は4月30日。ベトナム戦争が終結した日だ。明日の朝、ここでイベントがあるということで、その予行演習なのだろう。

ファンゲラオ¹近くのブイビエンへやって来た。運転手は部屋を見付けるのに付き合ってくると言ってくれた。まず最初に来たのはPhuong Hoang（フーンホアンって読むのかな？）というミニホテル。若い女の子が中から出て来て日本語で

「こんにちは。」

ときた。中華系かな。顔は日本人っぽい。フロントにパソコンがあって、彼女はそれで日本語の勉強中だったようだ。

部屋を見せてもらった。最上階の部屋。え？ソファがある！豪華すぎるぞ！

「ここは高そうだな。」

と言うと、彼女は3泊してくれたら1泊\$20にしますよと言ってきた。\$20か。値段はプノンペン²の宿と同じだな。でもフエ²へ行かなければならないから2泊しかできん。そう言うのと、フエへ行った後にまたここへ戻ってきて1泊して、トータルで3泊と提案された。いいか。この辺にはもっと安い宿があるはずだが、人間、一度\$20の部屋に泊まったことがあると贅沢になってしまうようだ。あっさりここに決めた。彼女いい人そうだし。

しかし金がピンチだ。3泊で\$60か。それから空港タクシーの兄ちゃんにも\$7払わなきゃならん。そんなにCASH持ってたかな。あらゆるポケットをごそごそし、まず\$7を払った。それから細かい紙幣も合わせてなんとか\$60あった。残ったのは\$5紙幣が2枚。まあ、食いつなげるだろう。でもフエ行きのチケットとか観光とかに金かかるだろうから、銀行に行かねば。

タクシーが帰ってから彼女に銀行の場所を聞いた。

¹ホーチミンの安宿街。バンコクのカオサン、香港の重慶大廈と並ぶバックパッカーのたまり場。

²ベトナム中部の阮（グエン）王朝遺跡のある街。

「疲れてない？今すぐ行くの？」

と驚かれたが、早く CASH を確保しとかなないと不安だ。ベトナムの通貨は全然持ってないし、T/C はそのままでは使えないし、ドルの CASH は \$10 しかない。今行くと言うと、声を掛けてくるシクロには気をつける、特に日本語で話しかけてくるやつはあなたを日本人かどうかテストしているから返事をするなどと言われた。

銀行に行って T/C を CASH に替えたあと、適当な食堂に入ってみた。ベトナムのテーブルと椅子は低いな。座るとそこのおばちゃんが

「Beer?」

と聞いてきた。とりあえず Saigon Beer を注文し、Fried Rice があるそうなのでそれを頼んだ。ビールのグラスには氷いるかと聞かれた。ここではビールに氷入れるのは普通なのだろうか。別に氷入れなくても、とても冷たくておいしいビールだった。そして、Fried Rice。ベトナム語でなんと言うのかはわからないが、かなり大盛りで嬉しい。唐がらしの入ったヌックマム³が付いて出てきた。Rice は黄色い。カレー粉かな。具たくさんで、上には葉っぱが載っている。これがベトナムでの初飯。う、うまい！これはうまい！最初にいい店に当たった。一気に平らげ、大満足で宿へ戻った。

部屋のエアコンをつけると、ブーンと変な音がした。フィルタを外して洗面台でジャブジャブ洗ったら直った。掃除しろよ。まだこの宿の周辺しか見ていないが、それほど治安が悪い感じはしない。声を掛けてくるシクロやバイクもタイやインドほどしつこくない。社会主義だからといって、違いは全然見あたらない。

宿のカードには日本語が書かれているのだが、「便利です」の部分が「便利ごす」になっているのに気付いた。戻ってすぐフロントの彼女に言うと

「知ってる。」

という答え。もう少し会話がはずむことを期待したんだけどな。でも、教えてくれてありがとうと言ってくれた。

5.2.2 シクロには乗るな 1998年4月30日(木)

めーっっちゃムカついた！こんなに腹が立ったことはない！二度とシクロ⁴なんか乗るもんかあーっ！それは旧大統領官邸前から始まった。あるシクロが声をかけてきた。初めは BANK へ行き、両替をしたあとベトナム航空オフィスへ行くという予定だった。

| | | | | | | | | | | | | | | {

まずその前のことから。今日は朝から歩いて旧大統領官邸へ行き、その一番上の見晴らしのいい部屋でとても楽しい出来事があったのだ。椅子に座って休んでいると、ベトナム人の男の子(18才)が私をベトナム人だと思ってベトナム語で話しかけてきた。腕とか日焼けして黒いからな。彼は自分の腕と私の腕を指差しながら同じ同じということをやっていた。それから昼ごろまで(2時間ぐらいかな?)、片言の英語でいろいろ話した。

³魚から作る醤油。タイのナンブラー、カンボジアのトゥックトレイと同じ。

⁴自転車の前に座席のついた人力のタクシー。サムロやリクシャーと同じようなもの。

『地球の歩き方』の写真や日本語をネタにベトナムのことを聞いたり、日本語を教えたりした。そのフロアには観光客相手にマイクで何か(ベトナム語だからわからん)を説明している、アオザイを着たお姉さんがいた。フロアに客が少なくなった時には彼女も交えながら、(彼女は日本語がうまい!)それはそれは楽しいひとときだった。

彼とはお互いに住所を交換し、最後は彼に

「今度いつ来るんだ。あなたに日本語を習いたい。」

と言われた。今度はいつになるかわからないと言うと涙ぐまれてしまった。彼は英語があまり得意ではないようなので、彼との間は自然に案内の彼女が日本語とベトナム語で通訳をしてくれていた。彼は私と話せてとても楽しかった、感動してますと言ってくれた。私もとても楽しかった。でも何をしてあげただろう。涙ぐまれると何か私もとてもうれしかった。

昼にはここは一旦閉まるそうなので、3人で(その時、私たちの他に客は誰もいなかった)エレベーターで下へ降りた。最後に彼が家へ来ないかと誘ってくれた。彼はとてもいい奴なのだ。お姉さんも、彼が住んでいるのはここからバスで2時間ぐらいの田舎で、とてもいいところだから、行ってきたらどうかと私に勧めた。田舎はフレンドリーでいいですよ、行くといいです。(私と彼女は日本語で会話。)私は本当に迷った。しかし今後の日程を考えると日数がどうしても足りない。フエでの新川さん⁵との約束がなければ行くことにしただろう。でもどうしてもだめだ。ちくしょー、せめてあと1日多くあればいいのに。また彼を涙ぐませてしまった。一緒に写真を撮り、堅い握手を交わし、手紙を書くことを約束して彼と別れた。

そしてそう、まさにその時、奴(シクロ)が現れたのだ。18才の彼はその時、メモした私の宿を奴に見せてしまった。そして私は宿ではなく、銀行とベトナム航空へ行きたいと奴に言い、いくらだと言うと

「あなた次第。」

と言ってきた。値段は決めないといけないと思い、\$1でどうかと言うと奴は2,000ドンでどうだと言ってきた。2,000ドン。その時、私は復唱したから奴がそう言ったのは間違いない。でも今考えると\$1よりも相当安い値段で、とってもあやしい。ろくに値段交渉もせず私はシクロに乗り、18才の彼ともう一度握手をして、写真を送るよと言って別れた。感動的だったのだ。私は油断した。シクロの運転手を疑うことすらしなかったのだ。

その後シクロは両替所、サイゴン駅(Airlineより安いからと奴に勧められて、鉄道でフエに行くことにした)、仏教系の寺、チョロンのピンタイ市場へと、奴に勧められるままに行った。今考えると、その都度いくらなのかを問い正すべきだった。そして宿へ帰り着かないうちに、疲れたから私はここまで、後は友達のリックに乗ってくれと言われ、奴の友達という1台のリックがいるところで降ろされた。その時点で16時ぐらいになっていた。どうも帰り道は行きよりも長くかかるなあとは思っていたが、暑いし、ずっと漕いでたからな。仕方ないかと思い、私はそこで奴のリックを降りた。

さて、そこでいくら払うことになったのか!

⁵同じ職場の1コ上の先輩。私と同時期にハノイからベトナム北部を中心に旅行。

| | | | | | | | | | | | | | | {

私は朝、宿を出た時にタクシー1日\$5でどうだと声を掛けられていた。また、空港タクシーは市内まで\$7だった。『地球の歩き方』によれば空港から市内までバイクタクシーでは\$3となっている。シクロならもっと安い\$1か\$2だと思っていた。

私はまず\$1を差し出した。奴は冗談だろと言う顔をした。じゃあ\$2、と出してもダメだ。私は相場がわからないんだ、いくら欲しいんだと奴に尋ねた。すると

「50,000 Japanese Don.」

という答えが返ってきた。Japanese Donというのは奴が意味するところのYenのことである。私は最初50,000ベトナムドンのことだと思い、ちょっと高いけどいいかと思っていた。しかし手持ちのドンが少なかったのでUSドルでいいかと聞くと、なんと\$200払えと言う。むちゃくちゃだ。私はドンを得ようと思って、議論しながら近くのバーへ入った。そこで何と2時間半もねばることになるとは知らずに…。

さて、Saigon Beerを飲みながら（今思うと奴の分まで払ったことに腹が立つ）、延々と続く議論が始まった。まず私は奴が勘違いしているのだと思い、US\$1は約16,000ドン（後で確かめたら12,000ドンだったけど）、US\$1は約¥130だという説明をした。奴は

「お前は何もわかってない。サイゴンの物価は高いんだ。」

だの

「俺には仲間がたくさんいる。シクロ仲間が明日お前を殺す。」

だのさんざん脅しにかかった。運の悪いことに、奴は私が明日9:00にフエ行きの列車に乗るために駅へ行くことを知っていた。本当に仲間を集めて駅に来るかもしれない。

US\$, ベトナムドン、Japanese¥入り乱れての議論。こいつ、混乱させようと思ってわざと3種類言ってるのか？ 私は自分の中で相当折れて\$10と決めた。それ以上払うもんか！ 奴は\$100払え、Japanese Donなら50,000と言って譲らない。冗談じゃない、50,000もあったらシンガポールへ行けるぞと言ったが奴は

「そんなの信じない。」

と言う。さっき買った鉄道のチケットだって\$51だぞと言っても奴は

「I can't believe.」

である。このやろー、絶対負けるもんか。

私は覚悟を決めた。とことん闘ってやる。奴が何を言おうと。奴の目を険しい目でにらみつけ、\$10を持った右手をテーブルの上に出したまま、ときどき歯を食い縛って見せたりした。敵もさるもの。\$10や\$20ならば受け取らないと言って拒否し、私が無理矢理\$10渡そうとすると、しまいには\$10札を私に投げつけたり、破ろうとしたりした。奴は

「俺じゃなかったら話を聞かずにお前は殺られてる。」

とか

「お前みたいな外国人は初めてだ。お前は悪い外国人だ。」

とか言う。

それでも、奴の言う値段は徐々に下がっていった。\$100から\$60、\$60から\$50+1,000ドンへ。しかしそこからは変わらない。どちらも譲らないまま、私のにらみと奴の脅しが

続いた。内心、

《やべー。明日で俺の人生終りか？メコン川に死体が浮かぶのか？》
と思ったりもした。でもダメだ、JAPANESE をなめるな！

ちょっとでも多く払うと言ったらこいつはつけあがるぞ。私はにらみつける目を更にきつくした。そして長い長い間の問答が続いた。途中から私は "\$10 only!" とか "Never!" とか言ってただけで、後は聞き流していた。目は絶対に奴の目からそらさないようにした。奴は

「おー、おー、強そうだねえ。」

と私の腕を掴んでからかったりもした。いくらこちらが強がっても動じないというアピールだ。(こいつの顔、アパッチ賢に似てるな …。)

ときどき奴はベトナム語で店の人とやりとりして、何を喋っているのかわからなかった。全員が\$10では少ないと言っているらしい。でも\$50、\$100はどうなんだ！奴が全てをちゃんと話しているかどうかどうも怪しい。奴は私に

「それは安い、とみんな言ってるぞ。」

と言う。英語を話せる人はいない。隣のテーブルで食事をしている夫婦は、我々に関わりたくなさそう。話しかけて巻き込むのはやめよう。外は暗くなり始めていた。しかもここはどこなのかわからない。

| | | | | | | | | | | | | | | {

奴はいらいらしていた。そして 18:30 を過ぎたころ、帰ると言い出した。\$10 なら受け取らない、だが明日サイゴン駅で待っていると行って立ち上がった。私はその時、店にいた人に向かって

「誰か英語の話せる人は？」

と聞いた。

いた。英語の話せる人が一人。奴を座らせ、これまでの経緯を説明した。昼ごろに旧大統領官邸前から乗ったこと、行った場所、奴が\$50 払えと言ってることなど。その人は全てを聞き、今の時刻を見て、最後に …

「\$40。」

という決定を下した !!!(まさに「判決！」という感じ。)

なんだとー！納得いかないのは、その内 16 時ごろから 18:30 までの時間も加味しているということだ。好き好んでここに座ってるんじゃないよ！時間かかっているけど、市内をまわっただけだぞ。それになんで時間で計算するんだよ。時間がかかったのはシクロだからだろ？

私はがっかりきた。\$40 なら宿にあと 2 晩も泊まれるじゃないか。朝聞いたタクシー\$5 というのが嘘だったにしても、\$40 もするシクロ(しかも屋根なし)に誰が好き好んで乗るか！大ショックだった。奴は、シクロは自分の足で漕ぐからタクシーやバイクタクシーよりも高いんだと言う。なんだその論理は。遅くて暑くて、さらに料金が高いシクロなんか誰も利用するわけねーだろうが。

\$50 と言って譲らなかった奴"に\$40でいいかと確かめ、\$40を手渡した。私の負けだ。しかし奴は最初\$200とかぬかしやがったんだぞ！金を渡すと奴は笑顔で

「どうもありがとう。」（日本語）

と来やがった。本当にうれしそう。手のひらをかえすよう、というのはまさにこのことだと思った。私を罵った数々の暴言。\$10を投げつけたあの態度。決して許せはしない。二度と「あなた次第」とか言うな、料金は始めにちゃんと教えろと奴に言ったが、金を手にした奴"はもう何も聞いちゃいない。さっさと帰りやがった。

奴が帰ると、私はえらく疲れているのに気付いた。2時間以上も過ぎていたとは。既に外は真っ暗。もう二度とシクロなんかに乗るもんかと堅く決心した。バーの英語を話せる兄ちゃん、もっと早く助けてよ。彼はその後シクロについていろいろと忠告してくれたが、聞くまでもなく身をもって知りましたよ。私はBeerをもう1本頼み、一気に飲み干した。兄ちゃんは

「ビジネスで来たのか？」

と私に聞き、私が

「ツーリストだ。」

と答えるとちょっと驚いた表情で笑った。多分、

《JAPANESEのツーリストにしては良くねばったな。》

という意味だったのだろう。

彼にタクシーをひろってもらい、宿へ帰りついた。\$1 + 2,000ドン。安い…。帰ると部屋のアコンが動かなくなっていた。リモコンの電池切れだろう。暑い。フロントへ行ったが待っててと言われたまま何の音沙汰もない。しばらくしてまたリモコンをいじったらついた。おー涼しい。

今日は本当に内容の濃い、暑い、そして「熱い」一日だった。英語であんなに白熱した議論ができた自分に今、驚いている。しかし、どう考えても\$40は高すぎるよなあ。バーの兄ちゃん、シクロに目を付けられるのが怖くて\$40なんて言ったのかな。さて明日、駅で何か起きるのか？

20:45 無言電話あり。フロントが間違っ掛けたんだったらいいけど。何か言えよ。気味が悪い。

5.2.3 おいしいご飯が食べたい 1998年5月1日(金)

鉄道の旅。目的地はフエだ。今日は駅にあのシクロは来てなかった。良かった。サイゴン駅にはひとつだけ列車が入っていた。それが私の乗る列車だ。中へ入ると通路が狭い。めっちゃめっちゃ狭い。私のベッドの位置をもの売りの子供が教えてくれた。一番下の席に座ってみると頭が上にぶつかる。高さが無いので前かがみに座らなければならない。きつい。でも横になればそこそこ快適だろう。

3段が向かい合って、計6つのベッドがある。下の2つは老夫婦。中段は私と、英語の話せる日本通のスポーツおじさん。上2つは上半身裸のじいさんと連れれの兄ちゃん。狭い空間に、この6人が入った。

日本通のおじさんは空手と柔道の有段者だそう。他の人は皆サンダルなのに、このおじさんはくつ下を履き、2002（日韓開催のワールドカップの年）のロゴが入ったスニーカーを履いている。Tシャツの袖をまくり、下は短パン。そしてベジタリアンだそう。車内で軽いランニングをしたりして、かなり健康的である。私は剣道と柔道を高校の体育の授業でちょっとやっただけだったが、2人で日本の武道の話をして盛り上がった。空手の師匠（師範かな？）が強いという話や、相撲レスラーは体がとてもでかかったというようなことを話してくれた。

この列車では、飛行機の機内食のように飯時になると車内食が出る。これがとてもまずい！ 寮の飯よりまずい。計4回出たが、違いなんか関係ないくらいまずかった。おかずが変わってもまずさは全然変わらん。弁当箱みたいなものに入っていて、スープは後からつく。飯がパサパサでおかずもとてもまずかった。スープはまあまあかな。

でも同じ時間に6人で一緒にとる食事はとてもとても楽しかった。英語を話せるおじさんがいてくれたのも運が良かった。せま～い車内で小さな簡易テーブルを囲んで、みんなと食事しながら話しをしたり、老夫婦が果物を切ってくれたりして、本当に楽しかった。まるで家族で旅行しているみたいだった。どこへ向かっているかはどうでも良く、この鉄道の旅がずっと続いてもいいなあ～と思わせるほどだった。ただし、まずい飯を除いて。

日本ではランチにいくらぐらいかかるんだと聞かれたので、

「\$3ぐらい。」

と答えたら

「そんなにすんのか！」

とみんなに驚かれた。ディナーは\$5ぐらいだと言うのにも全員がびっくりしていた。

「ベトナム人と結婚してベトナムに住んだらどうだ。」

と言われ、

「おお、それはいい！」

とみんなで笑った。途中、老夫婦がトウモロコシを「食べなさい」と差し出してくれたが、その時腹の調子があまり良くなかった。トウモロコシなんて一番消化が悪い食べ物だ。せっかくだが断った。みかんとリンゴは食べたけど。

5.2.4 世界遺産のある街 1998年5月2日（土）

長い長い列車の旅が終ると、川のある景色が美しいフエだ。この列車は昨日の朝9:00発で、フエに着いたのは今日の11:30ごろであった。つまり26時間半乗っていたことになる。ハードベッドはお尻が痛いと『地球の歩き方』に誰かが書いていたが、私は十分眠れた。

新川^{にいがわ}さんとの待ち合わせはミニホテル18に12:00。しかーし！『地球の歩き方』に載っているミニホテル18のある場所はカフェがあるだけでホテルなんてなかった。どういうこっちゃ。橋の入口でまず腰をおろし、どうしようか考えた。ちょっと近くの様子を見よう。ミニホテル18があるかもしれない。そう思って歩き出すと…すぐ見つかりましたミニホテル18。さて、新川さんはいるだろうか。

まず部屋を見せてもらってからこのミニホテルに泊まることにし、ホテルのお姉さんに

私の他に誰か日本人が来たかどうかを尋ねた。来ていないと言うので待たせてもらうことにした。だが1時間待っても新川さんは現れなかった。

私も時間がないので待つのをあきらめ、まず帰りのチケットを取るためにベトナム航空のオフィスへ向かった。オフィスはあるホテルの1Fにあった。チケットは6日の分まで満席で、ないそうだ。鉄道で帰るしかない…。思い浮かんだのはあのまずい飯。いやだー。でも仕方ないか。駅へ向かう途中からシクロの兄ちゃん(まだ15ぐらいに見える)が自分の横を付いて来る。かなりしつこい。いらないうてのに。

あんまりしつこいのと歩きつかれたのとで、カフェに寄ることにした。屋根があるだけのオープンな店だ。ここは『地球の歩き方』ではミニホテル18になっているところだ。川岸の見晴らしのいいところに座り、7UPを頼んだ。氷入りのグラスについて飲むジュースはうまい。2本飲んでしまった(250mlぐらいのやつ)。そこのおばちゃんが話していいかと言うので、いいよと横に座ってもらった。英語での会話なのだが、彼女の英語は聞き取りにくい。私には彼女はいないと言うと、娘を紹介しようかと言ってきて返答に困った。また、私はエンジニアだと言うとサイエンスへ話題が移った。面白かったのはおばちゃんは月へ最初に行ったのはソ連のガガーリンだと信じていることだ。アメリカのアームストロングだと私が言っても信じない。ソ連がそう言いふらしたのだろうか。また、ゴーストを信じるかなど、ちょっと宗教がかった話が出て来たりもして楽しかった。

カフェを出るとシクロの兄ちゃんが待っていた。俺は乗らないぞ。駅へ行ってチケットを買おうと、今日は\$60だった。前は\$51だったのに。なんでだ? 駅から引き返すと、途中でまたさっきのシクロが待ちかまえていた。しつこい。

駅でチケットを取った後はシクロを振り切り、王宮へと向かった。もしかしたらこのシクロはサイゴン⁶のようにタチの悪い奴らじゃないかもしれないが、もうシクロはごめんだ。それに王宮まではそんなに遠くなさそうだから必要ないだろう。観光は今日だけだ。いくら時間がないと言っても、フエに来たからには王宮ぐらいは見とかなきゃ。シクロの兄ちゃんは遠いと言っていたが、全然そんなことはなく、歩いて行ける距離だった。

王宮内は多くの遺跡がベトナム戦争で喪失している。入口の門と主要な2、3の楼閣が残っているだけだ。あとは広い草っ原に古い壁や階段、新しく作ったらしい休憩所のようなものがある。せっかく来たが、あまり感動がない。アンコールを見た後はどんな遺跡もかなわないだろう。アンコールを見る前だったらこのフエの遺跡を見て何かを感じたかもしれないが、これとって特筆すべきものは無かった。フエには他にも多くの寺や廟があるが、それを見に行くだけの時間ももうなかった。カイディーン帝廟などは特にすばらしいと聞いていたが残念だ。

夕日。ノンラーをかぶった人が歩いている。白いアオザイを着た学校帰りの生徒達が自転車で通りすぎる。のどかでいい景色だ。フラッグタワーの前の広場ではみんながサッカーをしている。その景色を暫く眺めてから宿へ戻った。

宿へ帰ると女主人(歳は多分30代、美人だが気が強そう。)にパスポートを渡せと言われた。明日の朝まで預ると言う。なんだ? そんなの聞いたこともない。スッと渡してし

⁶ホーチミン市の別名(1975年の解放前までの名称)。

まったが、良く考えるとそんなの今までなかった。

「なんで預けなきゃなんないんだ。理解できん。」

と食ってかかった。しかし、なにせ英語力のない私。向こうは《わからん人だねえ。》と言いたげだ。でもパスポートを手放すことはとても不安だ。何やらポリスのコントロールだとか言ってる。

「パスポートを肌身放さずもっていることはとても重要なんだ。」

と言ったら、

「もちろんそうだ。それはわかっている。」

という答え。必要なのは8時から9時までの1時間だとか。その後返すから、と聞き分けのない子供に説明するように言われた。でもなんで今晚から預けるんだ？納得がいかん。1晩も預けるなんて、偽造パスポートを作るには十分な時間じゃないか。こんなルール聞いたことないぞ。ホーチミンでは預けるなんて言われなかったし。でも彼女はどうしても返してくれない。不安な夜を過ごした。(結局預けたんかい！)

しかしこの部屋はブレーカーがよく落ちる。また、落ちてもすぐに回復しない。自分で廊下に出てブレーカーをONにしないといけないのだ。めんどくさい。流しは排水管がなく、汚水がそのまま足もとに落ちてくるし。内装はとてもきれいだがなんか不便だ。

夜は宿近くをうろうろし、バーへ入ってみた。なにか飯を食おうと思ったのだが飲物しかないそうだ。Tiger Beerを1缶飲んですぐ出た。裏通りのほったて小屋の飯屋へ入り、いろいろ載っかってるご飯を食べた。まずくはないが、うまいとも言えない。でも雰囲気良かった。近くに住んでいて店の人と顔なじみの人しかいないようだ。途中、停電になったりしたが、それもまた楽しい。ろうそくを出してくれた。帰り際におやじが

「コリアンか？ ジャパンか？」

と聞いてきたのでジャパンだと答えると、笑顔で

「そうか、またな。」

と言ってくれた。あんまりこんなところに食いくる日本人はいないんだろうな。それにしても、この国ではよく「Korean?」と聞かれる。海外旅行していると「Chinese?」と聞かれることはよくあるが、韓国人かと聞かれたのは初めてだ。韓国人旅行者が多いのかな。

5.2.5 ベトナムの車窓から1998年5月3日(日)

9時ごろ宿を出た。出るとき女主人が

「あなたのパスポートなくなっちゃったわよ。」

と冗談を言った。二人で笑った。パスポートはもちろん無事である。部屋番号の書いた袋に入って、鍵のかかる引出しにしまってあった。

「Have a nice trip!」

そう言って送り出してくれた。

今日も良い天気。さわやかな朝だ。途中で広場に座って休んだりしながら駅まで歩いた。列車に荷物を入れてからパンと水を買って車内へ戻った。今度は前のように英語が話せる人はいない。おばあちゃん2人、おばちゃん1人、7~8才の男の子1人、4~5才の女の

子1人である。

今回、なぜか私だけみんなと飯が違っていた。なぜか特別メニューなのだ。特別と言っても大して違わないのだが、おかずが違う。朝はみんなパン1個(大きめのクロワッサンみたいな)と水200mlなのに、私はフランスパンいっぱいと目玉焼き、水500mlだった。今回は前よりうまい。コックが違うとこんなに違うのか。昼のご飯もパサパサ感が少なく、あったかい。食べられる。でも、私の分だけみんなより早めに別に持ってこられるので、みんなとの一体感がない。乗ってすぐの時に職員の兄ちゃんが話しに来たりもしたから、外国人の乗客は私だけなのだろうか。乗員が私を気遣ってくれているのがわかる。また、前回と違うのはみんな食事を受け取る時に食券のようなものと引き替えていることだ。なんだそれ。前の時はなかったぞ。私は持ってないし。

おばあちゃんたちは自分で赤飯を持って来てたりして、私にも分けてくれた。お腹いっぱいだ。フエでの観光時間は少なかったけど、鉄道の旅は本当に楽しかった。

ちょっとお腹こわし気味。正露丸を飲んだ。

5.2.6 旅の終り 1998年5月4日(月)

14:30ごろ、再びサイゴンへ来た。さて、今日はベトナム旅行最後の日だ。とりあえず宿へ戻ろう。3日に帰ると言っていたのだが、フエで飛行機のチケットが取れなかったのが今日になってしまった。最初の日には3泊分払ったが、部屋は使えるだろうか。もちろんシクロは使わず、バイクタクシーをつかまえて宿へ向かった。彼女は笑顔で迎えてくれ、旅はどうだったかという会話をした。そして、シャワーを浴びてゆっくりして下さいと言って鍵をくれたので部屋へ上がった。いやー気持ちいい。シャワーを浴びてほっとした。この宿にして良かった。

ベッドに横になっていると、外から聞き覚えのあるメロディが聞こえてきた。アイスクリーム屋だとすぐわかった。以前、タイで聞いたのと同じメロディだったからだ。懐かしい。アイスクリームのメーカーが同じなのかな? 2時間ぐらい後、外へ夕飯を食べに出た。宿の隣のテラーでは何やら中華系の太鼓や笛が断続的に演奏されている。

最後の飯はベトナムで最初に入った飯屋に行った。夕飯時なので客が多い。みんなビールを飲みながら話に花を咲かせている。今回はみんなが飲んでいるビアホイを注文してみた。私は1人なので、プラスチックのピッチャーに半分ほど入って来た。飲みやすい薄いビールだ。飯は最初に食ったのと同じFried Rice。おいしかった。

帰りがけに土産屋によって、いくつか土産を買った。明るくて楽しいお姉さんだった。その後は街をぶらぶらした。サトウキビジュースをもう一度飲みたかったが、夕方だったのでもうどこもサトウキビがなくなっていた。まあ、1度飲んだからいいか。歩いていると、やはりシクロがしつこく付きまどって来た。乗らないよ。宿の隣のテラーは葬式が法事のような。飾り付けが赤や金で派手なのと、みんながおそろいのハチマキをしているので、てっきり祭りだと思ったのだが、おばあさんの写真が飾ってある仏壇(?)に向かって坊さんがお経を唱えてるぞ。祭りじゃないや。店の創立者の命日とかかな。宿へ戻ると、あいかわらずエアコンが動かない。原因は電池じゃないのかな。

飛行機は23:25発。21時に部屋を出て、1階へ降りた。タクシーを呼んでもらい、タクシーが来るまでの間彼女と話をした。結局この近くとフエしか見ていない。ホーチミンまで来ていながら、メコンデルタには行けなかった。つくづく休みが短いなあと感じた。まだ帰りたくないぞ。

タクシーが来た。彼女は最後に私に握手を求めた。手を握り、お互いにお礼と別れの言葉を言った。とってもいい思い出だ。うーん、また好きになっちまいそうだ。そういえば彼女が私にかけた最初の言葉は「こんにちは」だったけど、彼女が日本語をしゃべったのは最初のそれだけだったな。タクシーに乗り込み、窓から彼女に手を振って宿を後にした。あ、彼女と一緒に写真撮るときゃ良かったかな。彼女の写真1枚もない。

空港での手続きが終り、研究室へのお土産にコーヒーを買った後、喫茶店で休んだ。日本人多いな。相席した日本人のおじさんはベトナムは2回目だという。ニャチャンへバスで行ってお尻が痛かったという話や、サイゴンのシクロの話などを聞かせてくれた。おじさんも、初めて来たときはサイゴンのシクロにやられたそうだ。誰でも一度はシクロに腹を立てるんだなあ。私がカンボジアの話をする、興味をもってくれたようだ。いいですよー、シムリアップ。おかげでお互いに出発まで退屈しなかった。

帰りは日本航空。席は通路と通路の間にある中央5列のど真ん中だ。しかも上に荷物入れがない席。荷物は足もとに置いたが、うおー、狭い。トイレに立つのも大変そうだ。当然、両脇の4人も荷物は足の下。狭いー。機内では、ヘッドホンをつけてチャンネルをいろいろ変えてみたが、ずっとおんなじ音楽チャンネルのままだった。スクリーンに写されているNHKニュースの音声が欲しいんだけどな。まあいいかと思って暫く聞いていると、隣の女の子がヘッドホンをつけて彼女の席のチャンネルをカチャカチャまわし出した。あれ？俺の方に聞こえてるチャンネルが変わるぞ。おいおい、なんだこれ。配線ミスか？

5.2.7 思い出とともに 1998年5月5日(火)

真夜中、4~5時間のフライトで関空に到着した。全然眠れん。日本はやっぱ日差しがやわらかいな。関空は初めてきたが、何かすんげー近代的な建築物だ。ちっちゃくて素朴な空港ばかり見て来たからな。

福岡までは全日空。手荷物検査では案の定、はさみが引っかかった。でも

「機内で出さないで下さい。」

と言われただけで、預けなくても良かった。国内線はそんなんでいいのか。機内に入って驚いた。座席のスペースが広い。シートもなんか豪華だ。フットレストまでついてる。今まで乗ったなかで一番快適だぞ。国際線でこれぐらいの座席に座りたいなあ。客はほとんど乗ってなかった。

9:00ごろ福岡空港に着いてからフードコートへ行き、和定食と生ビールを注文して一気に平らげた。うまーい！大満足。周りの人を見ると、自分が日に焼けてるのが良くわかる。なんか服も汚い。

あつという間だったな。さっきまでベトナムに居たんだよなあ。帰ってきたけどあまり疲れていない。うおー、戻りてえー。今度旅に出られるのはいつだろうか。今回はとても

思い出深い旅であった。もう一度行きたい場所、もう一度会いたい人がたくさんできた。あの強い日差しが思い出される。

みんな、元気でな！

5.2.8 後日談

カンボジア - ベトナムの国境は陸路で越えたかったのですが、出発前に集めたあらゆる情報は「危険だからやめた方がいい」というものばかりでした。でも今は陸路越えるようです。タイ - カンボジア間の国境も開いたと聞きました。ただ、カンボジア側ではワイロを要求されるようです。やろうと思えば払わずにぶっちぎれるそうですが、やると撃たれるかも。

アンコールのバンテアイ・スレイへは、途中が危険だから行くのは控えたほうが良いと、帰国してから外務省のホームページを見て知りました。確かに銃持ってる軍人とかいたな …。

フエで新川さんは体調を崩して寝込んでたそうです。同じ街の中にはいたのに会えなくて残念でした。新川さんその他の旅行者によれば、たちの悪いシクロドライバーはサイゴンだけだそうです。ハノイはいいところらしいですよ。